

かた くら かね た ろう
初代 片倉兼太郎

至誠無息
—世界一の生糸王—



片倉兼太郎 (1849 ~ 1917)

写真：岡谷蚕糸博物館蔵

■信州から始まる日本製糸業の黎明

初代片倉兼太郎は、長野県川岸村（現長野県岡谷市）で代々里正（名主）を務める家に、1849（嘉永2）年、父市助、母ひろ子の長男として出生した。

父市助は1873（明治6）年、自宅で10人繰の座繰り製糸を始め、後を継いだ兼太郎は、次男光治、三男五介（今井五介）、四男佐一（二代兼太郎）ほか一族で協働し、製糸業に勤しんだ。

兼太郎は、長野県平野村（現岡谷市）の武居代次郎開発の諏訪式繰糸機を導入し、1878（明治11）年、天竜川河畔に機械製糸「垣外製糸場」32釜を創設した。

当時、輸出生糸商は製糸家に生糸の斉一品質と大量荷口供給を望み、そのため1879（明治12）年には、平野村の尾沢金左衛門、林倉太郎らと製糸結社「開明社」を組織した。開明社は各社共同し、1884（明治17）年には共同揚返場を新設、品質統制、生産拡大を行った。開明社は兼太郎の統率力と経営手腕で長野県下一の結社となり、岡谷中心の生糸は「信州上一番格」と呼ばれる市場標準格生糸となる。



垣外製糸場（手前に流れるのが天竜川） 写真：岡谷蚕糸博物館蔵

■世界一の生糸輸出国へ

1890（明治23）年、兼太郎は繭や用地を求めて、郡外の長野県松本に「松本片倉清水製糸場」48釜を創設。運営にはアメリカ帰りの第五介が当たり、発展した。

また、1894（明治27）年には川岸に、360釜の「三全社」を設立。これは当時最大の富岡製糸場を上回る規模で、片倉本家・新宅・新家の三家一致団結の経営で、垣外製糸場、松本製糸場と合わせ個人経営として全国一の規模となる。その後、「片倉組」を興して一族で事業拡大、兼太郎はそ

の組長として統監した。

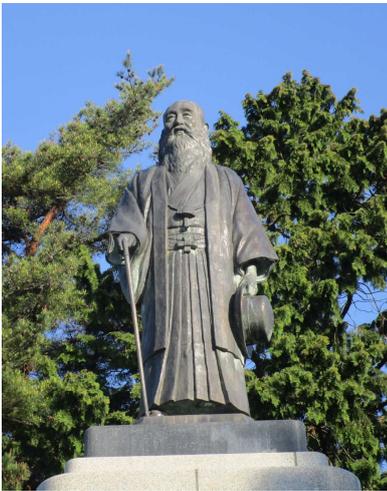
片倉組は明治30年代には県外へも進出、旭日昇天の勢いで躍進する。これに呼応して、日本は1907（明治40）年、生糸宗国の中国を超え、生糸輸出世界一となるのである。

■今に通じる経営哲学

片倉兼太郎は、いち早く製糸業の将来性を見抜き、日本の近代化を牽引する産業へと発展させた実業家である。そこには、一族の強固な繋がり、兼太郎の卓越したリーダーシップがあるが、質素儉約、堅実経営、技術重視の経営哲学と、自身は「至誠無息」（至誠一貫、真摯に事に当たれば道は必ず開ける）を成功の根幹に置いた。また、教育・公共事業にも積極的に貢献し、「事業は人なり」と労使協調、従業員の厚生にも力を注いだ。

兼太郎は1917（大正6）年に急逝するが、その後、川岸の鶴峰公園には初代片倉兼太郎の銅像が建てられ、今なお信州の陽光を満身に浴びて屹立している。

（林 久美子）

岡谷市の鶴峰公園に立つ
初代片倉兼太郎像